

## 『解深密経』「勝義諦相品」における不一不異説

那 須 円 照

『解深密経』では、不一不異を一と異を超えるという不一不異の併存状態にとどまらない境界を目指すという、修道論的立場が濃厚である。該当箇所([Lamotte1935: pp. 42-47])

世尊は、行の相と勝義の相とが別異でない場合の不合理性をまず論証する。この場合、有漏なる行の相も、無漏なる勝義の相と区別がなくなり、無漏なる勝義の相を認識できない愚かな凡夫も、有漏なる行の相を見て無上の安穩の涅槃・無上正等覚を得るという不合理なことになる。また、次に世尊は、行の相と勝義の相とが別異である場合の不合理性を論証する。この場合、有漏なる行の相に雑染なる固有の実体性があり、無漏なる勝義の相に清浄なる固有の実体性があり、真理を見るものたちにも、勝義の相以外に、行の相も認識の対象となるから、行の相の雑染なる実体性を減することは不可能であるから、行者も相縛・麁重縛からのがれられず、真理を見ることも無上の安穩の涅槃・無上正等覚を得ることもないという不合理なことになる。この同一性と別異性を超越したところに、適切に行じることがあるのである。次に世尊は、前説の例証とは異なり、論理的に簡潔に行の相と勝義の相の同一性と別異性の個別的关系を批判する。まず、行の相と勝義の相とが別異でないならば、行の相と勝義の相がともに雑染の相に墮する場合があるという不合理なことになる。次に、行の相と勝義の相とが別異であるならば、すべての行の相において、勝義の相が、行の相の法性的本体としての共相でないという不合理なことになる。世尊によれば、真実のあり方というのは、勝義の相は雑染に墮することはなく、すべての行の相において勝義の相が共相となる

あり方である。行の相と勝義の相は不一不異なのである。

世尊は、本体的には法と法性とは同一として不適切な異を一へと超越し、諸行と勝義とには有漏・無漏の区別があるとして不適切な一を異へと超越する。世尊の意図としては、この超越を踏まえた上で、最終的には、適切な一をそのままに、止観によって匚重縛・相縛から解脱して、有漏を無漏へと世界を浄化することが目標とされる。（龍谷大学仏教文化研究所客員研究員）